

【名古屋】愛知県陶器瓦工業組合（愛知県高浜市、縦山朋久理事長）と日研（神奈川県寒川町、北村真也社長）、未来建築研究所（東京都千代田区、向山敦社長）は、無機塗料の原料に規格外瓦から製造したパウダーを採用し、愛知県安城市のマンシヨンの外壁で実証実験を始めた。無機塗料に瓦端材を混入するのは路面塗装などで実績があるものの、建築物の外壁に使用するのは珍しい。今後、耐久性などを検証しつつ、年内にも地方公共団体などへ提案する。

「三州瓦」端材で 外壁用無機塗料

愛知陶器瓦組合など実証

愛知陶器瓦工業組合は、三州瓦の規格外製品を年間3万ト回収し、2万9000トをリサイクル利用している。今回は無機塗料メーカーの日研などと共同開発したもので、組合が三州瓦の端材を0・5ミリ以下のパウダー状にし、日研が自社工場で塗料として仕上げる。パウダーの比率は塗料の15%程度で、塗装後は30%となる。実証実験ではマンシヨンの外壁に薄オレシンのパウダー入り無機塗料の塗装を実証

長寿命、ランニングコスト抑制

ジ、えんじ、グレーの3色の塗料を計450平方メートルの壁面に塗装する。今後はマンシヨンの屋上で塗装のばく露や色差試験などを行い、性能を検証する。

無機塗料は原料がシリカなどで、瓦との親和性も高く、日研の北村社長は「性能が劣化することはほとんどない」という。

また無機塗料は有機塗料よりも製品価格は高くなるものの、長寿命のため塗り替えなどのランニングコストが抑えられ、同組合の試算によるとマンシヨンの外壁などで50年間使用し続けると、有機塗料のランニングコストは無機塗料の1・5倍になる。

日研は今後、公共施設など同塗料の採用を呼びかけるとともに、環境意識が高いデベロッパーや建設会社、さらには大型の工場などにも売り込みをかける。